



タイトル この世はウソでできている

編 者 池田清彦 (いけだ・きよひこ)

出 版 社 新潮社

発 売 日 2013年5月15日

ページ数 206頁

ご存じ池田節です。「健康のため」、「安全のため」、「環境のため」というウソでは、ウソで得する人がいる反面、損する人も大勢いる。だまされないためには、何がウソかだけでなく、ウソの構造についても知る必要がある。本書は、そのための参考書として執筆したと著者は述べている。

人々がだまされるウソのほとんどは、「健康」、「安全」、「環境」がらみのものだと著者はいう。章ごとに著者の主張を追ってみよう。

第1章 「民主主義のウソ」

国民の自由と平等と安全を守るためと称して、つまらない法律や規則が作られ、かえって自由でも平等でも安全でもなくなっている事態について述べる。

ひとたび法律が作られると、法律を守ること自体の方が、法律の目的よりも大事になってしまう。

第2章 「ウソの道具としての科学」

科学がかってのように、人の役に立ち、それによって金儲けができる、といった健全なものから、人を脅かして金儲けしようという不健全なものにシフトしつつあるのではないか、という観点から、多くの事例について解説する。

第3章 「世界を動かすウソのからくり」

金というバーチャルに支配されて暴走を続ける世界経済システムについて私見を述べている。

第4章 「現代人はどんな『ウソ』にだまされるのか」

コントロール願望という言葉をキーにして、自己家畜化が進む現代人の弱点を考察している。

「おわりに」では、エネルギーが枯渇して自然エネルギーだけしか使えなくなってしまう世界と、核融合というエネルギー革命が起きて、末永く潤沢なエネルギーが使えるように

なる世界を比較して、人類の究極の幸福はどちらにあるのかに言及している。

第4章に「近代化とクレマーの増加」の話が出て来るが、クレマーとは、「自分の正当性を主張する人を意味」する。

2011年3月11日に発生した東日本大震災によって露わになったこととして、被災した人は、支援してもらわなければ何も生活できないという現実だった。つまり、「近代化とは生活に必須なインフラをすべて他者に任せていくプロセスのことだ」というのです。水も、食糧も、エネルギーも、金を払うことによって他者から供給してもらおうというシステムの中で、我々は生きているわけです。

そこで何かが起こって、それらの供給システムに不具合が生じると、人々は自分自身の力で生きてはいけない。今回の大震災の場合は、自衛隊に物資を届けてもらったりする以外に、生活する術を持たないという状況だったわけです。

近代化に伴いクレイマーが増えるのは必然で、人々は、水が出なくなれば水道局にクレームを言い、停電になれば電力会社にクレームを言う。供給を完全に他者に依存してしまっているわけだから、何かあっても供給路を絶たれてしまった場合には自力でそれらを手に入れることが出来ない。

ただただ供給者にクレームを言うことしか方法が無くなってしまっている。すなわち、自分では何もできないから、文句をつけること以外に解決方法を思いつけないというわけである。それが習い性になると、何においても、ちょっと解決がつかないことがあったらすぐに、他人に文句を言う。そんな人が増えていくのは必然である。

例を挙げると、学校の先生が辞める理由の大半も、保護者からのクレームがきっかけとなっているという。それでは困ると言うので、何かクレームをつけられてトラブルになった時の為に弁護士を雇えるようにと保険に入っている教師が急増しているという。

保護者にクレームをつけられた時に、自分ではうまく対処できないから、弁護士に対処を依頼するというわけです。その弁護士費用を賄うための保険があるという。保護者は教師をなめて、高圧的にクレームをつけるが、相手が弁護士となると、恐れをなして、クレームを引っ込めるケースが多いという。これは通常のバッシングとよく似ており、相手が弱いとみるとどンドン文句をいうけれども、手ごわい相手が出て来るとさっさと引っ込んでしまうのと同じである。

教育の現場では、密かにモンスター・ペアレントと言われていたが、最近ではもうみんなが知っている。

- ・能力不足の担任を替える
- ・部活のユニホームは学校で洗え
- ・うちの子を正選手にしる

などと執拗にやられては、先生も参ってしまうだろう。親の思いが全面肯定される不思議な世の中になってしまった。

ともあれ、近代化に伴ってクレマーが増えていることと、自活能力が落ちていること

は、関係している。

自分のことを自分で出来る人はクレイマーにはならない。先述の自己中は国のレベルでも同じである。

同じクレイマーでも、面白い話がある。「朝日新聞のトンデモ読者投稿」(浮遊舎 MOOK)の中に、「自己中心主義」(自己中)の紹介がある。投書してもなかなか取り上げてもらえないところをみると、ここに掲載された主張は、朝日の編者が説得力のある投書だと判断したのでろう。とにかく読んでみよう。

「3月下旬、2泊3日の東京巡りをして、沢山の楽しい思い出を胸に、東京発「ひかり」に飛び乗りました。

空席が多かったので、荷物を右の座席において腰を下ろしました。その時、車掌が検札にきました。私の切符を見て、4千円余りを払って下さいとのことでした。グリーン車でした。財布の中には2千円少々しか残っていませんでした。

自由席を3両歩きましたが、全部満席。疲れが出て、それ以上空席を探す気になれません。出入り口近くにバッグを置いて腰かけ、足は対面の壁にくっつけて疲れを癒しながら考えました。

切符は、金券ショップの格安店3店を回って買った9300円のものでした。車掌さんは横を通っても、声をかけるでもなく、空しい1時間50分でした。

180円の切符を買っても「有難うございます」と言葉をかけてくれる私鉄の駅員さんがいるかと思えば、JRは1万円近い切符でも空席の案内もありません。二度とJR新幹線は利用したくありません。サービスは3流です」という投書です。

本文を読んで「説得力があるな!」と感じましたか? 「グリーン車でした」と書いているが、金券ショップを3軒もまわって格安チケットを探し求めるほどの人ですから、その区別を知らないわけはありません。このご婦人は60歳近い人ですが、この人はグリーン車と判っていながら勝手に座ったわけですから、確信犯と思われます。

さらに、空席の案内もありませんとは、自分勝手な言い分です。座りたかったら、指定席をとるとか、(東京駅は始発ですから)並べば自由席でも座れるのです。そうしないで、混んでいる列車に勝手に乗り込んで座れなかった乗客には、車掌としてもどうしようもないのです。まさに、このご婦人は自己中ですが、朝日の購読者の中にこんな自己中がいることを説得力のある投書だと信じて編者が掲載したのであれば、編者も自己中なのでしょう。…………。

このように、著者の文章に付け加えて話を展開していくと、テーマごとにどんどん話が膨らんでいきます。皆さんもやってみてはどうですか。

2013. 12. 9